

マーク・トウェインの動物観の変化にみられる チャールズ・ダーウィンの影響

The Change of Mark Twain's View of Animals by the Influence of Charles Darwin

文学研究科英文学専攻博士後期課程在学

小林 多恵子

Kobayashi, Taeko

目次

はじめに

I. ダーウィンとトウェインにおける神の位置づけ、及び人間と動物の能力の違い

1. 神の位置づけ
2. 高等動物の定義
3. 人間と動物の能力の違いについて
 - (1) 知的能力
 - (2) 道徳と良心

II. 人間の高等動物からの下降

1. 環境決定論
2. 人間の下降

III. トウェインの動物観の変化

1. ダーウィンを読む前
2. ダーウィンを読んだ後

おわりに

参考文献

はじめに

キリスト教の教会は「種は変わらず」と説いている。その思想が限界に達してきたころに、チャールズ・ダーウィン Charles Darwin (1809-82) によって進化論が発表された¹。「人間は下等動物から

¹ Charles Darwin (1809-82)、『種の起源』*The Origin of Species* (1859)、『人類の起源』*The Descent of Man* (1872)

進化した」と説く彼の進化論は人びとに大きな衝撃を与え、神が人間を創造したというそれまでの概念を覆した。ダーウィンは、人間が神によって創造されたものではなく、人間と下等動物が同じ生物であるということを科学的に分析している。また彼は環境決定論の立場を取り、生物は環境を変えることはできず、環境によって変化していくと説いている。

マーク・トウェインは、ユーモアを交えてキリスト教社会を痛烈に批判し、社会を風刺したアメリカの作家である²。ダーウィンの進化論がトウェインの作品に影響を与えたことは一般的に知られている。その例としてまず、シェーウッド・カニングスは論文の中で、トウェインは19世紀のダーウィニズムに十分応えていると述べている。また、ハイアット・ワッゴナー、アレキサンダー・ジョーンズもトウェインの環境決定論はダーウィンの進化論に起因していると訴え、ダーウィンからの影響を指摘している³。事実、ダーウィンの進化論の影響はトウェインの作品の中のあちこちに見られる。さらに、彼の作品の中には動物を扱う物語が数多くあるため、それらを一冊の本にまとめたものはある。しかしながら、進化論がトウェインの動物観に影響されているかどうかを研究しているものは、現在まだ見当たらない。そこで本稿では、ダーウィンの進化論による影響がトウェインの動物観にどう影響され、動物を用いることで人間に何を訴えているのかを考察する。

Iでは、ダーウィンとトウェインの作品を比較、考察し、相違点・類似点を挙げていく。そして、彼らは神の存在の位置づけはどのようにしていたのか、及び彼らにおける人間と動物の違いを分析する。IIでは、ダーウィンの進化論が、「人間の高等動物からの下降」というトウェインの理論にどう発展していったのかを環境決定論に基づき述べる。そしてIIIでは、結論として、トウェインがダーウィンの影響を受ける前の作品と受けた後の作品を比較し、その作品の中でトウェインの動物観がどう変化しているのかを考察する。

I. ダーウィンとトウェインにおける神の位置づけ、及び人間と動物の能力の違い

ここではダーウィンとトウェインによる思想の相違点と類似点を挙げていき、神が人間など全てのものを創ったという考えは、科学的な考えでは不可能であるということをトウェインもダーウィンと同じく考えていることを示していく。

1. 神の位置づけ

ダーウィンは自らの自伝の中で人間における神の存在についてこう言っている。“The more we

² Mark Twain (1835-1910)、本名サミュエル・クレメンズ Samuel Langhorne Clemens

³ Sherwood Cunnings, 'Mark Twain's Social Darwinism', (*Huntington Library Quarterly*, Vol.20.1957.), Hyatt Howe Waggoner, 'Science in the Thought of Mark Twain', (*American Literature*, Vol. 8. 1937.), Alexander E Jones, 'Mark Twain and the Determinism of What is Man?', (*American Literature*, Vol.29., 1957.)

know of the fixed laws of nature the more incredible do miracles become” (Francis Darwin, p. 62) ダーウィンがここで言っている“Miracles”とは、神が人間を創造したことを指すキリスト教における“Miracles”のことである。キリスト教の言う“Miracles”は自然の法則として科学では証明できないものであるとダーウィンは考え、人間が誕生したのは、自然淘汰の故であるとした。あらゆるものは個別に創造されたものではない。故に、人間は神の意志によって創造されたものではなく、自然淘汰の結果、他の生物から進化して誕生したとダーウィンは訴えている。

ダーウィンは人間の神への信仰心について、もともと人間が神を信ずるようになったのは子どもの時から神を信じるべきであるという思想を無意識のうちに教えこまれたからであると考え。つまり、神を信ずることを一人ひとりが考えて欲しているものではないととらえた。彼はこのような信仰心について、自発的なものではなく、遺伝の一つであると表現した。

トウェインも実際動物園に行つて実験を行っているように、科学的根拠を大事にしている。トウェインは神の造つたものは絶対であると人間が暗示にかけられているととらえていた。“They make Him [Gods] think we [man] approve of all of His [Gods] works.” (Devoto, p. 231) ここでのTheyとはwordのことを指しており、神を称賛する言葉はただのcomplimentsであるとしている。人間は言葉によってその気にさせられてしまっていると訴える。またトウェインはこうも述べている。

Among ourselves we concede that acts speak louder than words, but we have persuaded ourselves that in His case it is different...But seriously, does anyone really believe that? Is it not a daring affront to the Supreme Intelligence to believe such a thing? (Devoto, p. 231)

人間は、本当は神の矛盾に気付いているのだが、それを見て見ぬふりをしてわざと神にだまされており、実際は、誰も本当に神のことを信じている者などいなく、そのことに向き合わず、神に騙されたふりをしているということは、知性への侮辱であるとしている。知性で判断することが必要であり、いつまでも神に騙されたふりをしていることは人間の本来の価値を埋めてしまうことになる。トウェインはダーウィンの見解を踏まえて読者にもう一歩深く、実際人間は神の奴隷ではなくて、自らの知性で判断し、どうしていくべきかを訴えていることが伺える。そうしないといくら神のことを賞賛していたとしても本来の行動が伴っていかない。このことをトウェインは、ハエを例に用いて述べている。神が全てのもを創造したとするならば、ハエも神が創つたものである。しかし人間はそのハエを軽蔑の念を込めて殺している。その行為はハエの創造主も軽蔑していることになるのである。こうして神への信仰心に矛盾が生じていく。

トウェインは『不思議な少年44号』 *No. 44. The Mysterious Stranger*の中で「神なんていうものは存在しない」と44号のセリフとして述べ、宇宙も、人類も、地上の生活も、天国も、地獄も存在はせず、それらは全部人間の考えた夢なのであると説く⁴。神も人間が考え出したものの一つの存在にすぎ

⁴ *No.44. The Mysterious Stranger* は1969年にニューヨーク大学の教授W.M.ギブソンがカリフォルニア大学出版局から「マーク・トウェインの『不思議な少年』自筆原稿集」を刊行し、1982年に単独で刊行された。(『不思議な少年 44号』, p.261)

ないのである。

2. 高等動物の定義

ダーウィンが人間を高等動物とし、それに対し人間以外の生物を下等動物と呼ぶのはなぜか。ダーウィンは“Man may be excused for feeling some pride at having risen, though not through his own exertions” (*The Descent of Man*, p. 689) と述べている。人間は、身体的に、道具を生み出しそれを使うことができ、文字も用いることができるなど下等動物よりもさまざまに勝っていると考えられている。人間は初めから生物の最高位にいたわけではなく、少しずつ能力の進化をとげて昇りつめ、さらにその能力はまだ進化し続けるという希望を我々は持っている。また、人間の優位性は下等生物に起因していることは疑うことのできない事実であることをダーウィンは指摘している。そして、人間を最高位と考えるもう一つの理由として、真理を追求する唯一の生物だからであるとしている。高等動物とは人間だけが理性を持っているが故に真理を発見することができ、人間には動物にはない高度な能力を身体的にも心理的にも持っているものをいう。このようなことからダーウィンは人間を高等動物と呼ぶ。

トウェインも人間の存在をダーウィンと同様にとらえた。このことから明らかにダーウィンの影響を受けたためにトウェインの考えにいたったと思ってよい。ただし、トウェインの場合、さらにその人間の持つ特別な能力があるために、人間のほうが下等動物よりも劣化したととらえている。このことについては本稿Ⅱの「2. 人間の下降」の中で詳しく述べていく。

3. 人間と動物の能力の違いについて

ここでは、人間と動物の持つ能力、特に心理的な能力についてダーウィンとトウェインの立場を考察し、トウェインの考えがダーウィンに起因しているものであることを立証していく。

(1) 知的能力

人間と下等動物を比較した時、心理的能力について、ダーウィンもトウェインも知的能力（以下、知能）については、人間だけが持つ特別な能力としてとらえているのではなく、動物も同様に持っていると言く。

ダーウィンは下等動物と人間は根本的に大きな差はほとんどないとしている。知能についてダーウィンはこう述べる。“some intelligent actions, after being performed during several generations, become converted into instincts and are inherited,” (*The Descent of Man*, p. 89) つまり、ある知的なものはたがは、数世代にわたって完成されたのちに本能に変わり、遺伝となると説く。例えば、小島に住む鳥が普段現われない人間を発見すると避けるという行為は、最初は知能であったが後に本能に変わり遺伝として受け継がれているものである。これと同様に昆虫も本来は驚くべき知能を持つ

ており、ビーバーにおいてはさらに高度な知能を持っているとして、ダーウィンは下等動物における知能の存在を明らかにしている。

また、本能とは生物が生きていく上で、自分に必要な行動を無意識的に起こすことである。例に挙げた鳥のように、生命の危険を回避するための行動は、初めは知能と呼んでもよいかもしれないが、後にそれは本能となることによって、生物は無意識的に危険を回避できるようになる。

トウェインも知能と本能についてダーウィンと同じ考えをもっていることが推察される。『人間とは何か』 *What is Man* (1906) の中で老人は青年に語りかける。

Now my idea of the meaningless term “instinct” is, that it is merely petrified thought; solidified and made inanimate by habit; thought which was once alive and awake, but is become unconscious (p. 77)

トウェインは本能について、かつて生き生きとしていた思考（知能）が石化（無意識化）したものであるととらえており、この思考の過程は、ダーウィンの説く知能は本能に変わり遺伝するという考え方に当てはまる。動物にも人間にもそれぞれ個々の本能はあり、その行為は、考えても本能だから意味はなく利益もないが、本能は当初思考によって生まれたのである。よって、トウェインはダーウィンと同様、下等動物と人間も思考する能力を持っていると考えている。

（２）道徳と良心

ダーウィンは、次のように述べている。

I fully subscribe to the judgment of those writers who maintain that of all the differences between man and the lower animals, the moral sense or conscience is by far the most important. (*The Descent of Man*, pp. 120-127)

ダーウィンは、動物がお互いに助け合う心を持っていることを主張している。なぜそのような心を持っているのか。ダーウィンは以下のように説いた。社会的にお互い守りあっていかないと生きていけない動物は、仲間に同情を感じる。しかし、「自然淘汰」に関係のないものに対しては何の感情も持ち合わせない。同じ共同体の仲間だけに同情は向けられるのである。これは生きていくための動物における道徳であるとする。つまり、動物が同情を感じるのは自然淘汰からくとダーウィンは考えているのである。

人間も社会的に群れを作って生きる生物である。そのため同情もするし、お互い助け合う。しかし動物との違いは、自然淘汰に関係のない範囲にまでその道徳は向けられることである。ダーウィンは、人間と下等動物との根本的な違いはここにあるとしている。この違いの理由として彼は、人間が良心を持っていることを挙げている。人間が過去の行いを心に思い浮かべ、自責、後悔、悔恨を感じるのは、他人の批判と関係しているためだとし、今後は今までとは違った行動をしようと決心していくとダーウィンは説いた。

トウェインも道徳と後悔に対してダーウィンと同じように展開している。人間は頭では理解していても心では本当にわかっていないことがある。一般的に正しいとされ、人間として為されるべき行為であっても、実際の場合では必ずしもそうはできない。人間は罪を犯してみないとわからない。経験することにより人間には「罪意識」が生まれる。このトウェインの考えは、ダーウィンの言う「後悔」に当てはまる。人間は罪意識をこれ以上増やさないために思考をする。他人が自分のことについてどのように考えるかを頭に置いて、善悪や正邪を判断しようとする。そしてダーウィンの思想と同じく、ここで良心が生まれるのである。

人間は良心の呵責にかられる。しかし、ここでトウェインは人間に警鐘を鳴らしている。ダーウィンも述べているように、良心とは他人の目を気にして後悔しないように次の行動を決定することである。しかし良心に従うことは、周囲の反応を気にし、自分自身の心で考えることや反省をしていないため、また同じ過ちを繰り返してしまう。せっかく自分で経験しても他人の目を気にして良心に従って考えることにより、本当の意味で罪を予防することにはならないのである。

トウェインは彼の代表作である *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) の中で、良心に従わずに決定していくことの重要性を、主人公ハックの生き方を通して訴えている。ハックはダグラス未亡人との生活（自由のない社会に縛られた生活）から逃亡し、再び気ままな生活に戻るが、それまでの生活がいかに自分に適していないものだったかを友人のトムに吐き出している場面がある。

“Well, everybody does that way, Huck.”

“Tom, it don't make no difference. I ain't everybody and I can't stand it...I don't take no interest in vittles that way.” (p. 254)

ハックは、周囲の人々が社会に縛られ、良心に従っている生活をしているからといっても、自分は自分であるので同様の生活は我慢できないとトムに話す。つまり、ハックは良心ではなく自分の意思で動いているのであって、社会体制などは気にせず自分に正直に生きているのである。動物もハックと同じ感覚であるため、社会体制がどうであろうとそれは自然淘汰には関係のない範囲にとらえ、人間が良心に基づいて作り上げた社会ではなく自然的諸現象という環境に即して生活している。

従って、人間は良心を持つが故に環境に反して良心に従っていくことから、人間は劣化しているとトウェインは考察している。

II. 人間の高等動物からの下降

1. 環境決定論

道徳や罪意識そして良心は、両親の影響や教育など、人間が生まれ育った環境によって変化し、このことをダーウィンはこれを自然淘汰の結果としていることはすでに述べたが、トウェインはこのことを「人間機械論」を用いて説いている。この二人の説は、人間の意思は神によってあらかじめ決定

されたものであるという運命論として考えるのではなく、自然的諸現象によって人間の意志が規定されているという環境決定論に位置づけられる。

ダーウィンは『人類の起源』の中でこう述べている。“If bad tendencies are transmitted, it is probable that good ones are likewise transmitted.” (*The Descent of Man*, p. 148) つまり、宗教や教育により人々の道徳観は変化していくため、それぞれの時代や人種、国により文化と価値観の違いから宗教や教育も異なっていく。よって、「悪い行為」“bad tendencies”の意味も異なり、本来「悪い行為」であるのに正しいものとして教えこまれる可能性も出てくる。例えば、自分の国を守るためには戦争で他国の人々を殺すことが正しい行為だと教育された人間は、殺人を悪いことだとは思わなくなるように、人間は正邪の判断が逆転していくのである。その結果、人間は「悪い行為」を非常に行いやすくなる。このようにダーウィンは、人間がその生まれ育った環境の影響を受けざるを得ない生物であり、その環境次第でどんな人間にもなれることを訴えている。

またトウェインは1907年のスピーチの中でダーウィンと同様に生きた環境、すなわち教育による影響によって人間は変わっていくことを以下のように述べている。

Everything in the world is accomplished by influences which train and educate.

When you get to be seventy-one and a half, as I am, you may think that your education is over, but it isn't. (*Mark Twain's Speeches*, p. 331)

このようにトウェインは、生涯死ぬまで人間が教育による影響を受け続けることを述べている。つまり、良い教育をすれば良い良心が、悪い教育をすれば悪い良心が生まれることを訴え、教育次第で良心もいかようにも変わっていくことを示唆している。

トウェインは、いくつかの作品の中でこれについて人間機械論を用いて展開し、人間に警告をしている。*Letter from the Earth* (1962) の“The Damned Human Race”の一節を、一例として紹介する⁵。

I[man] am a machine. I am slave to the law of my make, I have to obey it, under all conditions. I do nothing, of myself. My forces are set in motion by outside influences, I never set them in motion myself. (p. 228)

トウェインはこの作品で、ウサギ、ライオン、狐、馬などの動物を裁判にかけられる場面を描いており、ここでのIとは人間のことを指し、最後に機械として人間を裁いていく。その場面で被告人（人間）は、自分は機械であり、環境の奴隷であり、自分自身では何も決定することができない存在であると述べる。これはトウェインにおける人間に対しての皮肉であり、人間は環境の影響を避けることはできない。環境の奴隷であると風刺している。要するに、世の中の出来事は必然、不可避の鎖の一つの輪であり、生物は逃れようといくらもがいたとしても最初から決定されているので逃れることはできない。従って、トウェインの説く人間機械論とは、人間は自由なように見えてもしつけ、習慣、因襲、

⁵ “The Damned Human Race” は1905年から1909年の間に執筆された。

交際、性癖、周囲の状況といった鎖につながれ、自分の意志がなく機械のようにただ動かされているだけであることを表わしている。

2. 人間の下降

ダーウィンは、人間が高等動物であることを科学的に認めてはいるが、人間が下等動物以下の残忍な行為をすることについて嘆いているように考察できる。このことは、人間が高等動物から劣化していると説くトウェインの考えに類似している。その部分が『人類の起源』の一節にある。

For my own part I would as soon be descended from that heroic little monkey, who braved his dreaded enemy in order to save the life of his keeper, or from that old baboon, who descending from the mountains, carried away in triumph his young comrade from a crowd of astonished dogs — as from a savage who delights to torture his enemies, offers up bloody sacrifices, practices infanticide without remorse, treats his wives like slaves, knows no decency, and is haunted by the grossest superstitions. (*The Descent of Man*, p. 689)

ダーウィン自身は、卑劣な行為をする未開人（人間）の子孫であるよりも下等動物の子孫でありたいと望んでいることが推察される。その理由の一つとして、人間は社会で適合するために、優位な力を持つ人についていく傾向性があることを挙げている。“As soon as a tribe has a recognized leader, disobedience becomes a crime, and even abject submission is looked at as a sacred virtue.” (*The Descent of Man*, p. 142) とダーウィンが述べているように、ある部族の中で認められた指導者に従わないとその部族から排除されてしまうため、無理やりで卑劣に服従させられたとしてもその部族の人間はその指導者に従う。それが生き残るためには必要だからである。つまり、善良で何でも誰にでも従っていく気の弱い人間のほうが、自分の信念を曲げることができずに勇敢に意見を言う人間よりも、社会にとっては有用とされるということである。歯向かわずになんでも従う人間のほうが、権力を持つ人間にとっては都合がよいからである。また、多数決や、全員一致でものごとを判断し、決定したとしてもそれが本当に正しい判断とは言えない。全員が間違った判断をしているかもしれないのである。

トウェインも人間の傾向性についてダーウィンと同じ見解をしている。“We are chameleons, and our partialities and prejudices change places with an easy and blessed facility, and we are soon wonted to the change and happy in it.” (*Mark Twain's Speeches*, p. 316) 人間はカメレオンのように偏愛や偏見はその時と場所によって変幻自在に変えられることを述べている。

また、トウェインは人間が下降している様子を動物と比較して述べ、動物から人間は、学ぶべきであることを示唆している。例えば、『イヴの日記』*Eve's Diary* (1906) には、こうある。

so I made friends with the animals. They are just charming, and they have the

kindest disposition and the politest ways; they never look sour, they never let you feel that you are intruding, they smile at you and wave their tail (*Mark Twain Collected Tales*, p. 704)

イヴは動物たちを心から信頼しており、決して敵とも思わず尊敬している。自分と同じ仲間であり、彼らこそ完璧な紳士だと思っている。

トウェインは、人間には善と悪を区別できる能力があるが、動物にはその能力はなく、動物は罪を犯すことを知らないと考察している。殺すという行為も動物は悪いと感じておらず、罪について気がつかないようにできている。つまり、それについては無心なため、動物に悪は存在しないが、人間は良心を持っているが故に悪が存在するのである。他の者を無駄に苦しめてそれを見て楽しんでいるのは人間だけである。人間だから残酷なことができる。動物は無心であり、他の者に無関心であるから不道德なことはしない。人間は虚栄や野心、生意気な心を持つが、動物にとってはどうでもいいことである。動物は一線をひくことはなく、ありのままを受け止め、それを除外することはない。人間はすぐに自分よりも下だと思ったものを軽蔑する。

従って、動物のほうがよっぽど徳をわきまえているとトウェインは動物から人間は学ぶべきであると示唆している。人間の心も体と同様に下等動物から進化したものであるのに、進化するにつれて心は生命にとって大事なものを失っていることから、トウェインは、人間は高等動物から下降していると考えている。

Ⅲ. トウェインの動物観の変化

トウェインは、1871年あたりにダーウィンの本を購入しており、それ以後の作品や自伝から考察できるようにダーウィンの作品をよく読んでいたことが推察される。また、1879年にダーウィンとその妻とイギリスの湖で会っている。従って、トウェインはダーウィンのことを畏れ多く思っており、とても尊敬していたということが考察できる。

1. ダーウィンを読む前

トウェインの動物観は、ダーウィンの作品を購入する以前の作品と以後の作品で異なっているため、その変化が動物の描き方に表れている。まず、変化が生じる前の動物の表現を見ていく。

トウェインのデビュー作となった『とび蛙』*The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* (1865年に刊行され、67年に改訂) は、ずる賢い男の“知恵”を中心に描いており、以下の引用のように人間の視点で描かれている。

He ketchted a frog one day, and took him home, and said he cal'lated to educate him; and so he never done nothing for three months but set in hi back yard and

learn that frog to jump....Smiley said all a frog wanted was education, and he could do 'most anything (*The Mysterious Stranger and other stories*, pp. 20-21)

スマイリーは蛙を見下しており、蛙の気持ちは一切描かれていない。トウェインは、スマイリーが動物よりも賢い人間として表現している。

次に、『イノセント・アブロード』*The Innocents Abroad*について考察していく。この作品は1869年に新聞掲載されたものであり、人気が高かったため、71年に改訂され、本として出版された。これはトウェイン自身の旅行記でもあるので、頻繁にその旅行の移動手段の一つであるロバや馬が登場する。たいていそこに共通して描かれているロバや馬は、みすぼらしい姿である。

Chapter 40では、ロバをまるで旅行者である人間の敵であるかのように描いている。

Occasionally we grew so tired and breathless with fighting them that we had to desist,—and immediately the donkey would come down to a deliberate walk. This, with the fatigue, and the sun, would put a man asleep; and as soon as the man was asleep, the donkey would lie down. My donkey shall never see his boyhood's home again. He has lain down once too often. He must die. (*The Mysterious Stranger and other stories*, pp. 20-21)

旅行中トウェインの一向はロバに乗って移動しているが、そのロバは乗り手の意図する方向へ進まないため、乗り手が苦勞する場面である。舵取りに格闘し、疲れ果てて眠くなった乗り手とともに、そのロバも一緒に寝転んでしまう。乗り手はロバが寝転ぶ度に転がり落ち、いつまでも目的地には着かない。その状態を頻繁に繰り返されれば、乗り手の人間としてはこのロバを殺したくもなるだろう。しかし、ロバの気持ちになればどうであろうか。棍棒で殴られながらも、どこから来たのかもよくわからない人間を乗せて歩かなければならないのだ。乗り手は眠ってしまうし、自分も疲れたからといって寝転べば叩き起こされ、なぜかその見知らぬ人間に殺してやりたいとまで思われてしまうのである。ロバをここまで痛烈に描くことができるのは、完全に人間を主体とした見方だからである。トウェインはこの場面でも動物の見方では描いていない。

次にChapter 44では、野良犬について描いている。旅行中の道端には犬が多数いるが、その犬たちは今までトウェインが野良犬に思っていた人間を襲う怖い印象とはまるで違い、眠りこけているみすぼらしい犬であった。多くのノミがその犬たちの火傷の跡に繁殖している。そのノミに噛みついて取ろうとするとついついハエに気を取られてしまい、いつまで経ってもノミを取ることができないまぬけな犬なのであった。ここでもまたトウェインは人間から見た動物として描いている。人間がその犬たちを見て、憐れに感じる気持ちを表している。決してその犬には近寄りたくないし、その犬に成り代わりようとも思わない。あんなみすぼらしい犬ではなくて、人間でよかったと読者に思わせる描写である。

Chapter 50では、周囲のことに全く気を遣わない迷惑な存在としてラクダを描く。このラクダはす

れ違うのが困難な狭い道でも道を譲ろうとはしない。もったいぶってゆっくり歩き、人間をイライラさせる。いかにも気持ちの悪い存在として、人間はラクダを煙たがっている。物思いに耽っていた一行の中の一人にラクダが近づいて来て、肩にわけもなく咬みついた。ラクダにしてみれば下唇で人間の耳を舐めたり、肩に咬みついたりすることは親しい意味を込めてしているのかもしれないが、人間はそれを温かく受け入れることはしない。このラクダの場面からも、トウェインが動物を人間と同じ生物として見ているとは思えない。

2. ダーウィンを讀んだ後

ここでダーウィンの作品に出会った後の1884年の作品である *The Adventures of Huckleberry Finn* に描かれている動物と上述してきた内容を比較してみると、*The Innocents Abroad* とは異なる動物観が見受けられる。

The Adventures of Huckleberry Finn の中で描かれている栗鼠について見てみよう。“A couple of squirrels set on a limb and jabbered at me [Huck] very friendly.” (p. 49) ここでの me はハックを指しており、栗鼠が登場する自然描写の場面である。栗鼠は喋っており、しかも人間に話しかけている様子が描かれている。ハックには栗鼠の喋っている内容がどこまで読み取れているのかは別としても、心と心は通じ合うものがあるとする立場が読み取れる。栗鼠はハックのことを親しい友達であるかのように親しげに接し、一方ハックはそれを受け入れ、優しく見守る。

同じく Chapter 8 の蜂についての場面では、蜂を人間と同じ生物として描いている。

And he [Huck] said if a man owned a bee-hive, and that man died, the bees must be told about it before sun-up next morning, or else the bees would all weaken down and quit work and die. Jim said bees wouldn't sting idiots; but I didn't believe that, because I had tried them lots of times myself, and they wouldn't sting me. (p. 60)

蜂蜜の巣を日頃世話している男が死んだとしても、蜂たちもその男と一緒に死んでしまうことのないようにとのハックの蜂に対する配慮が見られる。また、この場面では生物と人間との交流が描かれている。蜂は、「馬鹿」は刺さないのでハックは蜂に刺されない。つまり、蜂はハックのことを「馬鹿」だと見分ける力を持っている生物であることを読者に伝えている。従ってこの場面においても、蜂が人間を見分けるという見方により、人間主体の一方通行の見方とは異なっている。

次に Chapter 14 では、動物同士それぞれの言葉が存在することを描いている。黒人ジムはフランス人も自分たちと同じ言語である英語を話すことと当然思っていた。国や人種によって、言語に違いがあることを彼は知らなかったのだ。フランス人はフランス語を話すことをハックはジムに教えるが、ジムはなかなかそれを理解できない。ハックは猫と牛に例えてそれを説明する。猫と牛は人間の言葉の話さず、猫も牛もお互い違った言葉で話す。それは当たり前のことであり、正しいことであるとハック

は述べる。よって、フランス人が我々と同じ言葉を使わないのも当たり前のもので、正しいことであると説得するが、ジムは猫と牛は人間ではないから人間の言葉を使うことはないと反論する。同じ人間同士の我々とフランス人はなぜ違う言葉を使うのか理解できないとジムは頑固にも続けるのである。ハックはこれ以上ジムに話しても無駄だと思い、断念する。

動物が種類によってそれぞれ違った言葉を使うという発想は、動物を人間と対等に分類しているからであり、ダーウィンと同様の発想であることが考察できる。動物を取り扱ったトウェイン以前の物語を、例を挙げて考えてみると、『イソップ寓話』 *Aesop's Fables* (500B.C) では、動物たちは言葉を使すが、犬も馬も同じ言葉を使い通じている。すなわち、とくに動物たちは分類されていないわけであり、人間と対等の扱いをされていない。また、『ガリバー旅行記』 *Gulliver's Travels* (1726) の馬も同様に、人間と同じ言葉を使って普通に話しているため人間と対等ではないのである。これらはリアリズムがなく、科学的でもないため、ファンタジーの世界といえよう。

更に後の作品である *Pudd'n head Wilson* (1894) では、*The Innocents Abroad* でさんざん馬鹿にしていたロバについて褒め称えて、ロバの性格はほとんど完璧だと述べている。

There is no character, howsoever good and fine, but it can be destroyed by ridicule, howsoever poor and witless. Observe the ass[donkey], for instance: his character is about perfect, he is the choicest spirit among all the humbler animals, yet see what ridicule has brought him to. Instead of feeling complimented when we are called an ass, we are left in doubt. (Geismar, p. 7)

ここでトウェインは、人間の教訓としてロバを用いている。特に1890年代のトウェインの作品になると、動物は人間より優れており、動物から人間は学ぶべきであるとして動物を用いている。人間と動物の相互を比較することで、人間に何かを気づかせる描き方をするようになり、動物を讃えるようになっていられる。

『イソップ』の動物も常に互いに知恵比べをしているが、人間にはかなわない（人間が作品に登場しない場合でも、すべてを観察し、コメントする作者イソップにはかなわない）し、『ガリバー』の馬もヤフーより優れていても、ガリバーにはかなわない（ガリバーほど物を考えていない）。ガリバーは自分がヤフーと同じであるということを馬に悟られないようにと、馬よりも先を見て行動をしている。このことからガリバーの思考は馬よりも進んでいると考察できる。馬は、ガリバーはヤフーと姿形はよく似ているがヤフーとは違った生物であると思い込んだまま、話は進んでいく。

The Innocents Abroad の作品ではまだ動物の描き方に対して、世の中で生きているもの、ただそういうものというくらいにしか描かれていないため、動物を主観にしているというよりも人間が生きていく中で遭遇した動物たちを描いている。時にはひどい口調で描く時もあるが、そこの中にも親しみを込めたトウェインの気持ちがうかがえる。しかし、後々の作品になるにつれ、人間を取り巻く存在というよりも、トウェイン自身が動物の気持ちになって、動物から見る人間など、動物主体の描き方

になっている。そして、人間はより残酷な行為をする生物であるという内容を描く時に、動物を用いて描き、より人間の残酷さを読者に感じ取らせるようになっている。そこにはダーウィンの人間と動物を同じ生物として見る思想の影響があると推察する。人間やあらゆる生物は神が創造したものではないという進化論の根幹となる考え方により、トウェインも人間と動物を対等の生物としてみるようになり、動物観に変化が生じたのである。

おわりに

トウェインはダーウィンを畏れ多い存在として見ており、とても尊敬していた。ダーウィンの進化論は下等動物から人間は進化したものであると主張し、人間は理性を持っているがゆえに真理を発見することのできる生物であるとしている。これができるのは人間だけである。トウェインも人間は動物にはない理性、良心などを特別な能力を持つと考える。動物は自然的諸現象という環境に即している。人間は良心を持つゆえに環境に反して、良心に従う。トウェインの思想はダーウィンと一致している所が多々あり、その思想の展開の仕方も似ていることから、人間と動物の考え方についてダーウィンの影響を受けていることが言える。

本稿では、ダーウィンの作品を読む以前と以後の作品を比較し、動物についてどう描かれているかを考察してきた。ダーウィンを読む前のトウェインの作品の動物の描き方は、動物を主体にしているというよりも人間が生きていく中で遭遇した動物たちを描いている。しかも、後の作品になると、人間を取り巻く存在というよりも、トウェイン自身が動物の気持ちになって、動物から見る人間など、動物主体の描き方になっている。そして、人間はより悲惨な行為をする生物であるという内容を描く時に、動物を用いて描き、より人間の残忍さを読者に感じ取らせるようになっている。それは、ダーウィンが動物は人間よりも優れていると考えている理論をトウェインが取り入れたことに起因するものであると考える。人間やあらゆる生物は神が創造したものではないという進化論の考え方を受け、トウェインも人間と動物を同じ生物としてみるようになり、動物観に変化が生じた。トウェインは、人間の存在意義、また、人間が持つ課題をより濃く浮かび上がらせる手段として動物を用いた。このような描き方により、人間の抱える解決すべき問題がより明確になってくるのである。

参考文献

Aesop. *Aesop's Fables*, London: Penguin Popular Classics, 1996.

Cunnings, Sherwood. 'Mark Twain's Social Darwinism', *Huntington Library Quarterly*, Vol.20.1957.

Darwin, Charles. *The Descent of Man*, London: Penguin Classics, 2004.

Darwin, Francis, ed. *The Autobiography of Charles Darwin and Selected Letters*, Darwin,

- Charles. New York: Dover Publications Inc., 1958.
- Devoto, Bernard, ed. *Letter from the Earth: The Intelligence of God*, Twain, Mark. Harper Perennial Modern Classics, 1962.
- Fatout, Paul, ed. *Mark Twain speaking*, Twain, Mark. University Iowa Press, 1876.
- Geismar, Maxwell, ed. *The Higher Animals: A Mark Twain Bestiary*, Twain, Mark. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1834.
- Gibson, M. William, ed. *The Mysterious Stranger Manuscripts by Mark Twain*, Twain, Mark. Berkeley, Los Angeles, London: University Press, 1969.
- Gribben, Alan, ed. *Mark Twain's Library a reconstruction*, vol.1, Twain, Mark. Boston: G.H.Hall, 1980.
- Le Master, J. R. and James D. Wilson, ed. *The Mark Twain Encyclopedia*, New York & London: Garland Publishing, INC, 1993.
- Jones, E. Alexander. "Mark Twain and the Determinism of What is Man?", *American Literature*, Vol.29., 1957.
- Mckeithan, Daniel, Morley, ed. *Traveling with the Innocents Abroad*, Oklahoma: University of Oklahoma Press, 1958.
- Neider, Charles, ed. *The Autobiography of Mark Twain*, Twain, Mark. New York: A Harper Perennial Classic, 1959.
- R. Kent Rasmussen. *Mark Twain A to Z*, New York: Oxford University Press, 1995.
- Stein, Anderson, Salamo, ed. *Mark Twain's Notebooks & journals*, vol.2, Twain, Mark. 1975.
- Twain, Mark. *The Adventures of Huckleberry Finn*, London: Puffin Classics, 1953.
- Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer*, New York: Aladdin Classics, 2001.
- Twain, Mark. *The Innocents Abroad*, London: Penguin Classics, 2002.
- Twain, Mark. *Following the Equator*, Vol.1, Wildside Press, 1897.
- Twain, Mark. *Mark Twain to Uncle Remus*, Georgia: The Emory University Library, 1953.
- Twain, Mark. *Mark Twain Collected Tales, Sketches, Speeches, & Essays 1891-1910*, New York: the Library of America, 1992.
- Twain, Mark. *The Mysterious Stranger and other stories*, New York: A Signet Classic, 1962.
- Twain, Mark. *Roughing It*, New York: Enrichard Classics, 2003.
- Twain, Mark. *The Writings of Mark Twain, Volume XXVIII, Mark Twain's Speeches*, New York: 1923.
- Twain, Mark. *The Writings of Mark Twain, Volume XXVI, What is Man? And other Essays*, New York: 1917.

Waggoner, Hyatt, Howe. 'Science in the Thought of Mark Twain', *American Literature*, Vol. 8.

1937.

スウィフト 平井正穂訳 『ガリヴァー旅行記』 岩波文庫 1980年

チャールズ・ダーウィン 八杉龍一・江上生子訳 『ダーウィン自伝』 ちくま学芸文庫 2000年

チャールズ・ダーウィン 八杉龍一訳 『種の起源』上 岩波文庫 1990年

チャールズ・ダーウィン 八杉龍一訳 『種の起源』下 岩波文庫 1990年

チャールズ・ダーウィン 池田次郎・伊谷純一郎訳 『世界の名著・ダーウィン人類の起源』 中央公論社
昭和42年

チャールズ・ダーウィン 浜中浜太郎訳 『人及び動物の表情について』 岩波文庫 1931年

マーク・トウェイン 大久保博訳 『アダムとイヴの日記』 福武文庫 1995年

マーク・トウェイン 有馬容子訳 『細菌ハックの冒険』 彩流社 1996年

マーク・トウェイン 中野好夫訳 『不思議な少年』 岩波文庫 1969年

マーク・トウェイン 大久保博訳 『不思議な少年 第44号』 角川書店 1994年

マーク・トウェイン 大久保康雄訳 『トム・ソーヤーの冒険』 新潮文庫 昭和28年

マーク・トウェイン 中野好夫訳 『人間とは何か』 岩波文庫 1973年

マーク・トウェイン 西田実訳 『ハックルベリー・フィンの冒険』上 岩波文庫 1977年

マーク・トウェイン 西田実訳 『ハックルベリー・フィンの冒険』下 岩波文庫 1977年

マーク・トウェイン 勝浦吉雄訳 『マーク・トウェイン自伝』上 ちくま文庫 1989年

マーク・トウェイン 勝浦吉雄訳 『マーク・トウェイン自伝』下 ちくま文庫 1989年

